

第18回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2024) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(気象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

山崎 正毅(シナネンホールディングス株式会社)

吉田 由紀(朝日小学生新聞)

最優秀賞

こころやさしいなきむし

植田 樹里……………4

シナネン賞

じいじとのやくそく

滝田 晴菜……………6

ミライフ賞

我が家のゼロ・クリエーター

能美 にな……………8

朝日小学生新聞賞

メロンソーダとコーヒー

原 蔵之心……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

「日本」けちなパパ

國吉 桃美……………12

ありがとう、ほくの家族

戸田 周……………14

み来の小さな親友

松岡 輝……………16

〈高学年の部3編〉

四十五通のたからもの

おばあちゃんの愛しかた

最高のごほうび

長崎 心遥……………18
世利 宗二郎……………20
長野 彪冨……………22

団体賞(5団体)

【福島県】 郡山市立大槻小学校

【群馬県】 高崎市立六郷小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【広島県】 福山市立金江小学校

【福岡県】 宇美町立井野小学校

主催…シナネンホールディングスグループ

朝日小学生新聞社

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数六、九二二作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ 「作家」

今回も、心をゆさぶられるたくさんの作品を読ませていただきました。みなさん、ありがとう。毎回そうなのですが、今回特に、やさしさがあふれていると、感じる作品ばかりでした。こういうやさしさがあふれる人。人はこんなふうな人にやさしくなれるんだ。わたし自身が気づかされた気がします。それは、みなさんの人を見つめるまなざしが、やさしいからでしょう。そして、それをきちんと表せる文章の力。すごいなあ、うなりました。どの作品も満点だと思います。

森田 正光 「気象予報士」

「ありがとう」は、一番身近な人に伝える事から始まって、多くの人への感謝へと広がっていきます。今回の「ありがとう」は、お母さんへが10編。そして次に多かったのが祖父への6編でした。孫を持つ身としては、この祖父への感謝が私自身への「ありがとう」のようにも聞こえました。

また今回は、ストーリー性に加え、場面が浮かぶ表現にも感じました。特に低学年の作品は素直な表現に心温まりました。

小島 奈津子 「フリーアナウンサー」

今年もたくさんさんの「ありがとう作文」を作って下さり、ありがとうございました。心が温まったり、躍ったり、切なくなったり、涙が出たりと、大いに心を揺さぶられました。こと更驚いたのは、近くにいる大人の声、かけや質問の答

え、また、言葉にしくなくてもその行動や態度を、きちんと汲み取り感謝できていることです。お互いの思いやりが通じ合うつて、素敵！ それを表現できる皆さんもまた素敵です。

山崎 正毅 「シナネンホールディングス株式会社」

日常の何気ない行動のつひとつに対して、子ども達はいかにか思っている以上の感受性を持って反応し、大切な人への愛情と感謝を感じているということ、心温まる作品を通じて感じました。常日頃から自身自身に関わる人への感謝の気持ちを持つこと、大切さを改めて教えていただいた、そんな気持ちになります。

毎年、全国から本当に素直な言葉の贈りものがあり、ありがとうございます。私からも皆さんに「ありがとう」の気持ちを送りたいと思います。

吉田 由紀 「朝日小学生新聞」

交わした言葉、食べさせてくれた料理、ふとした表情……。どの作品も、細かいところまでよく表現されていました。読んでみると、みなさんが「ありがとう」を伝えたい人との宝物のような時間を、短編映画のように心に浮かべることができました。

気持ちや言葉を表すのはむずかしいものですが、自分らしく向き合い、素直に書いていますと感じました。ひとつの文が長すぎず、リズム良く読めることにも、工夫を感じました。

(順不同敬称略)

植田 樹里

こころやさしいなきむし

わたしには、三さいのきはるというおとうとがいる。かおはわたしに、にているけど、めだけは、しばけんのあかちゃんみたいなたれめをしている。ほっぺをさわるといちごマッシュマロみたいにもふもふしてきもちがいい。こえがたかくて、みんなにいつもかわいい、かわいいとちやほやされている。たしかにかわいいけれど、わたしにとって、おとうとは、なきむしで、まいにちけんかをするあいてだ。けんかをするとおとうとはわたしのことをだいきらいとかならずいってくる。このときわたしのこころは、こなごなになる。そして、おとうとなんていなくなればいいとおもう。

ある日、わたしのぬいだくつを、おとうとがさわっていた。つかれてイライラしていたのもあって、

「かつてにさわらんでよ。」

と、わたしはめを三かくにしておとうとを、どなりつけた。すると、

「じゅりのくつそろえようしたのに。もう、じゅりなんてだいつちらい。」

なきながら、まだあかちゃんことばのおとうとがさげんだ。まただいつきらいっていった。だけど、そのときは、いつものきもちとはちがつっていた。なっているおとうとがかわいそうやら、もうしわけないやら、ごめんねとありがとうのきもちがわたしのなかで、ごちゃまぜになった。

「このあいだも、おとうとがひとりでコップにぎゅうにゅうをいれようとしていたから、
「だめっ。あぶない。こぼれるよ。」

と、わたしがとっさにさげんだ。おとうとは、まるでかいじゅうにあったときみたいに、
からだをびくっとさせて、

「じゅりのいれよう、もったのに。(おもったのに。)
と、えんえんないていた。

かんがえてみると、おとうとはいつもわたしのことをおもってくれていた。ただのなきむしじゃなくて、こころやさしいなきむしだったことにきがついた。そうおもうと、なんだかきゅうにおとうとをだきしめたくなった。

「きはる、たくさんなかせてごめんね。だいすきだよ。そして、いつもありがとう。」

評価のポイント

弟との日常が目に浮かぶぐらい、様々な感情やエピソードが丁寧にえがかれていた。感受性の豊かさが表れている作品。

じいじとのやくそく

滝田 晴菜

「ねたきりでもいいから、生きててね。」

わたしとのなにげない会話。じいじは、今もちゃんとまもってくれているよ。

じいじ。ありがとう。

じいじが元気だったころ、さいすのじいじのおひぎでいっしょにテレビをみていたよね。

「じいじは、はながこんなに大きくなったの見れっかなあ。」

とポソツと言ったから、じいじの光った頭をペシペシしながら、やくそくしたんだよね。

それからしばらくして、じいじはとつせんにゆういんしたんだよ。ふつうにびょういんに行ったはずなのに、それっきり二年い上、お家にもどってこない。さいしょはうそかと思っただよ。ゆめかと思っただよ。今まで、ずっといっしょにいたのに。毎日、じいじがようちえんの送りむかえしてくれて、おさんぽもいっしょ。夕方はじいじのすきなおすもう、いっしょにみていたのに。じいじがにゆういんして、じいじのさいすで一人さみしくてないいたんだ。じいじのおいかいでたら、ふとじいじの気もちになった。じいじもわたしと同じ気持ちだよ。じいじといつもいっしょにいたのはわたしだったから。

コロナがはやっていたから、ずっとお見まいに行けなかった。リモートでじいじの顔が見

られるようになり、今では週に一回面会に行けるようになった。じいじはもう話すことはできなくなっちゃったけど前と変わらないリスみたいなくりくりした目をぱちくり開いて、わたしのことを見てくれる。わたしが行くとニコニコになって、口をうごかしてしゃべろうとしているよね。言葉は話せなくても、わたしはじいじの気持ちや話そうとしていることが分かるよ。じいじもわたしも大すぎだからだよ。

とちゅうからじいじ、つかれちゃうから、

「じいじ、今週も元気でいてくれてありがとう。ねたままでいいから生きててね。」

と、言う、じいじは、口を上に動かして、にこってわらってくるね。

わたしは、じいじはまだまだ長生きすると思うよ。ねたままでいいから生きててね。わたしが大きくなるのを見たいもんね。毎日ごはんやお薬を体にいれてもらって、ねて、おきて、それを何回もちゃんとくりかえしてくれて、じいじはとってもえらい。すっこく大変なのに、毎日がんばってくれてありがとう。生きててくれてありがとう。わたしもね、毎日、わたしのできることをがんばる。ごはんをちゃんと食べて、ねて、起きて、学校いって、バスケット、お友達と遊んで、何回もくりかえして、大きくなる。一週間に一ミリくらいかもしれないけど、大きくなったわたしで、元気に会いに行く。そして、じいじに毎週伝えるよ。

「元気でいてくれてありがとう。やくそくまもってくれてありがとう。大すぎだよ。」
って。

評価のポイント

過去から現在へ祖父と過ごす日々を、孫の視点で情緒的につつられている。読んだ人の心を温かくしてくれる。

我が家のゼロ・クリエイター

能美にな

「ただいま。」

家に入ってぎよつとした。あまりにもいつもの光景と違う。台所は洗い物でいっぱい。取り込んだ洗たく物もかごに入ったまま。一度は出そうと思ったもののあきらめたらしいゴミ袋もあった。一言で表すならば、家の中は荒れていた。

奥の部屋で物音がする。母がねているのだ。いつも元氣な母がめずらしく風邪をひいた。幸いコロナではなかったが相当つらいようで、昨日からずっとね込んでいる。私はゴミ袋を所定の場所に置きに行った。洗いのくらいなら宿題の前に行けるなど思いながら、まずは洗面所に行き、手を洗う。スカッ。ハンドソープ切れだ。詰め替え用はどこにあったかな。棚を開けて探す。あった。ボトルは重くて、うつすときにこぼしてしまった。うーん、このまま洗面台もきれいにしておうかな。そうこうしていたら、あつという間に時間がたってしまった。居間に戻ると、母が起きて台所に立っていた。私はゴミ出しや洗面所の掃除をしたことを自慢げに話した。それから食器洗いの手伝いをする。食洗機も使うから楽だと思っていたが、食洗機の中には洗い終わった食器が残っており、その片付けから始めることになった。なかなかやりたいことが始められない。やつとおやつを食べ終わ

り、ごみを捨てて宿題を。ゴミ箱に次の袋がついていない。私がいらいらし悪態をつきながら次のゴミ袋をセットしている横で、母は淡々と食器用洗ぎの補じゅうをしていた。

洗ぎの補じゅうや次のゴミ袋の設置は、『名もなき家事』と呼ばれている。私たちが普段している『お手伝い』はこれらの名もなき家事の上に成り立っていることが多い。名もなき家事は、食器洗いやゴミ出しに代表されるようないわば『名のある家事』の準備や片付けをさしていることもある。

普段のお手伝いが『プラスを作る』家事だとすれば、名もなき家事は『マイナスをゼロに戻す』家事だ。プラスの家事はほめられやすい。成果が分かりやすいからだ。それに比べてゼロを作る家事はどうだろう。まず地味だ。今回のように、マイナスの状態を目の当たりにして初めて気付かれることさえある。しかしこれが整っていないと、あの時の私のように、行動の流れが止まってしまつて、いらいらすることが多くなつてしまうのだ。

ゼロを作ることは『日常』を整えることだ。当たり前前にありすぎて見えにくくなっている生活のスタート地点を整える、それがゼロを作る家事なのだ。家事が得意ではない母も、精一杯ゼロを作ってくれていたのだ。見えるものばかりがすべてではない。見えないものに気付き、感謝できる人になりたいと思った。

我が家のゼロ・クリエイターに感謝を。

お母さん、いつもありがとう。

評価のポイント

非日常から目の当たりにした日常、1つ1つの表現が秀逸。改めて身近な人への感謝に気付かされる。

メロンソーダとコーヒー

原蔵之心

ぼくはメロンソーダが大好きだ。ソファアのひじかけに置いて、ゲームをする。ストロイからのどを通って入ってくるメロンソーダは格別だ。ぼくの幸せな時間だ。

「あつ！」

ゲームに熱中しすぎた。ひじがメロンソーダに当たり、全てがじゆうたんにこぼれてしまった。「何しとんや！そんなところにジュースを置くからやろうが！」

父ちゃんの怒鳴り声が、リビングにひびき渡った。

「さつさとふけ！」

ぼくは、必死にこぼれたメロンソーダをふきながら、ぐつとくちびるをかみしめた。本当はこう言い返したかった。

「父ちゃんも、いつもひじかけにコーヒーを置いてテレビを見るだろ！何で自分は良くて、ぼくはいけないんだ！」

父ちゃんは、おこると怖い。自分のことをたなに上げて、ぼくのことをおこってくる。だから、ぼくは腹が立つんだ。弟とけんかをした時もそうだ。弟が悪くても、ぼくにおこってくる。弟びいきなんだ。だから、ぼくはとても腹が立つんだ。

父ちゃんは、自分勝手だ。父ちゃんのことを大嫌いだ。そう思う時がある。

正月に、父ちゃんと母ちゃんとぼくと弟で、じいちゃんの家に行つて、おせち料理を食べる。毎年恒例の行事だ。今年も、じいちゃんはいつも通り元気で、ぼくたちにお年玉をくれた。父ちゃんは、じいちゃんの長男で、よくぼくに長男の気持ちにはよく分かる、だからこそちゃんとした人になってほしいんだ、と言っている。

2月にじいちゃんが、急に亡くなった。その時、父ちゃんは、ぼくの肩をぎゅつとにぎりしめ、静かに泣いていた。おこると怖い父ちゃん、自分勝手に大嫌いな父ちゃんが、静かに泣いていた。

そういえば、父ちゃんはぼくが行きたいと言った所に、必ず連れて行ってくれる。週末は、ぼくのソフトボールチームのコーチをしてくれている。平日の夜は、トスバッティングを一緒にしてくれる。試合で打てなかった時は、一緒に悩んでくれる。ぼくが試合でかつやくしたら、一緒に喜んでくれる。時々、ぼくの小さい頃の動画を見ながら、にやにやしている。父ちゃんの携帯電話フォトは、ぼくの写真や動画であふれている。

なんだ、大嫌いと思うことより、いい所のほうが多めだな。ちゃんと言ったことないけど、今度、ありがたうって言ってみようかな。

評価のポイント

好き・嫌いの正反対なエピソードを通じて、父への思いを自覚していく過程が素晴らしい。人間味にあふれ、共感を呼ぶ。

「日本一けちなパパ」

國吉 桃美

わたしのパパは日本一けちです。あたらしいおもちゃがしんはつばいになっても、ぜったいかつてくれません。いもうとがおみせで

「パパ、これほしい。」
と言っても、

「おうちにおさがりでもらったおもちゃ、たくさんあるでしょ。まだまだたのしめるよ。」とおへんじ。

パパとかいものについてもぜんぜんたのしくありません。おやつはかってくれないし、すきなキャラクターのグッズもかってくれません。かわりにパパがかうのは、ねさげのシールがついた、しょうみきげんギリギリのたべものばかりです。わたしはがっかりです。いえの中でもけちだらけです。パパはでんきをすぐにパチパチけます。パパといっしょにおふろに入って頭をあらうときも、

「シャンプーは少なめにだして、おゆであわだててからつかってね。」
と言つてたくさんつかうとちゆういされます。

ごはんのとべのこしもしかられるし、ティッシュや水のつかいすぎもおこられます。

「むだづかい、もつたないよ。」
が、パパの口ぐせです。

「パパはどうしてこんなにけちなのかなあ。」

とわたしは言うとうママが教えてくれました。

「パパは新ぶんしょう学生だったんだよ。」

「新ぶんしょう学生？」

「新ぶんはいたつのしごとをしてお金をかせぎながら、勉強もがんばる学生さんだよ。パパは大学に行くお金がなくて、生かつかくるしかたから、はたらいて大学に行ったんだよ。そして、ゆめをかなえたんだよ。」

ママの話をきいて、これまで、けちで口うるさく思ったパパがすごいな、かっこいいな、とかんじました。わたしは、いま、はたらいていないけれど、学校やならいごとだけで、とてもたいへんです。それにくわえて、はたらいて、しんぶんはいたつもして、勉強をするなんてわたしにはできないと思います。

くろうしていっぱい力したパパだから、お金やものがありがたさが人一倍いわかつてそれをわたしにつたえてくれてるのだと思います。そう考えると、パパが本を買わずにとしょかんでたくさん本をかりてくることも、あながあくまでふくをきつづけることも、毎日のせつやくも、みんなすてきなことに思えてきました。むだづかいしないことは、かんきょうにもやさしいことにも気づきました。

パパ、大切なことをたくさん教えてくれてありがとう。パパが、新ぶんしょう学生をして、おいしやさんになるゆめをかなえたみたいにな、わたしもど力してじぶんのゆめをかなえたいです。

パパは日本一の、大すきなパパです。

ありがとう、ぼくの家族

戸田 周

ぼくはぼくの家族が大好きだ。ぼくの家族は、ぼくが生活をしっかりとることができるように、はたらくてくれていてお父さん、ぼくが元気にくらせるようにしてくれるお母さん、いつもぼくをわらわせてくれる、おもしろい妹のあいちゃん、おいしいごはんを作ってくれて、ぼくがお母さんとけんかをする、かならず味方になってくれるおばあちゃん、毎日には会えないけど、仕事が休みの日に家に帰ってきてくれて、サッカーを教えてくれるおじさん、そして今はもう会えないけれども、ぼくのすんでいる家をのこしてくれた、たぐみおじいちゃんの七人家族である。

ぼくはたくみおじいちゃんと会ったことがない。ぶつだんにおいてある、にっこりとわらったやさしい顔のしゃしんでしか、おじいちゃんのことをわからない。でもぼくはおじいちゃんのことを、たくさん知っている。それは、ぼくの家族がおじいちゃんのごい話、カッコイイ話、おもしろい話、わらってしまう話をたくさんしてくれるからだ。今日ぼくがのどがかわいたから、ゴクゴクと牛にゆうをのんでいたら、お母さんが

「周、そのみ方はおじいちゃんにそっくり。ゴクゴクとおいしそうにのむんだよね。」とわらっていた。ちなみにおじいちゃんは、ウイスキーと言うおさけが好きで、おさけ

なのに水のようにゴクゴクとのんでいたそう。

このあいだ、ぼくがはじめてカブト虫をつかまえてきたとき、ぼくはカブト虫がすこしこわくてあまりさわれなかった。なのでおばあちゃんに手つだってもらっていたら、おばあちゃんが

「周のそういうところ、おじいちゃんにそっくりよ。カブト虫をお母さんに見せたくてもってくるけど、自分はこわくてさわれないから、けつきよくおばあちゃんがせわをするかかりになるのよね。」

ほかにもぼくが赤ちゃんのころは、おじいちゃんに顔もたいどもにしていたらしい。今は令和ばんたくみと言われている。だからぼくは、朝、小学校に行く前におつだんで手を合わせる時、

「おじいちゃん、おはよう。今日も一日よろしくね。ぼくのあいぼう。」

と言う。そうすると、おじいちゃんが近くにかんじるからだ。ぼくは家族が好きだ。家族は、ぼくのことを好きでいてくれて、ぼくの味方でいて、ぼくに力をくれる。家族といえると楽しい。そんな場所をくれる家族にありがとうを言いたい。いつもぼくを大切にしてくれてありがとう。たくみおじいちゃん、いつもぼくのあいぼうでありがとう。今日もぼくは守られている。

み来の小さな親友

松岡輝

「お母さんのおなかに赤ちゃんができたよ。」

きよ年のサンクスギビングの時に言われた言葉だ。そのしゅん間、わたしはないた。一人っ子がよかったのに。せつたいにお母さんとお父さんをとられちゃうと思ったからだ。わたしは、おばあちゃんにそうだんした。

「おばあちゃん、弟が生まれた時どうだった。」

おばあちゃんは、言った。

「弟が生まれる時、おばあちゃんは二才で、いやだったから、全ぶのしょうじを手でパンパンとやぶったよ。でも、大じょうぶだよ。赤ちゃんが生まれたら、かわいいから。」

わたしは、それを聞いて、わたしもしょうじをやぶりたい気持ちと本当にかわいいと思えるのかなというふ安な気持ちでいっぱいだった。

お母さんのおなかが大きくなると、赤ちゃんがおなかをけてぽこつとなると聞いて、手を当ててみた。手にぽこつてかんじた時、本当に赤ちゃんが生きてるんだと思つて、ふ思ぎだった。

お父さんから赤ちゃんが生まれたと聞いた時、本当に生まれたんだ。わたしは本当にお姉ちゃんになったのとふ思ぎな気持ちだった。学校の帰りにびよういんに行つて、はじめて和ちゃんに会った時、本当にお母さんは赤ちゃんをうんだんだと思つた。きゆうに妹が目の前にあらわれて、きゆうにお姉ちゃんになってうれしい気持ちとお姉ちゃんになれるかふ安な気持ちがまざっていた。でも、和ちゃんを見ると、手も足も全ぶ小さくてかわいかった。手をさわってみたら、ぎゅつてにぎつてくれてうれしかった。

和ちゃんといっしょに生活してみると、くしゃみがおじさんみたいな大きいくしゃみでおも白い。ねてる時にだっこされると、アニメの小犬みたいにキュンキュン言う。ごきげんでおきてる時、手足をじたばたする。かみの毛がにわとりのときかみたいにま上に立っている。ベッドにねかされると、せ中にスイッチがあるかの様にすぐおきてかいじゅうの様に大なきする。自分を見てわらつてくれる様になってうれしい。話しかけると、アーとかウーとかへんじをしてくれるようになった。みんなが何かを食べていると、食べたそうによだれをたらして、自分の手を口に入れてチュパチュパ大きい音を出してすっている。その全てがかわいくて、全しんまで回したくなるぐらい和ちゃんが大好きだ。

大きくなったら、いっしょにピアノをひこうね。いっしょにカードゲームをしようね。いっしょにたくさんおしゃべりしようね。いっしょにたくさん色々な思い出を作ろうね。これから親友みたいな姉妹になろうね。

和ちゃん、わたしの妹で生まれてきてくれて本当にありがとう。大好きだよ。

四十五通のたからもの

長崎 心遙

「足なんてなくても、こっちゃんの笑顔が大きい！」
私が下を向くと、とつきにはーちゃんが言ってくれる。

二年生の冬、朝起きると、とつぜん下半身が動かなくなった。そして病院に運ばれた時には、手も足も身体も全く動かさなくなっていた。原因不明の病気で、自分で自分の、脳やせきずいをこうげきする病気だ。薬も治りよう法もないとつけられた。

初めての入院生活は、わくわくしていた。お友達が手紙やプレゼントをくれて、一日中お母さんと二人で病室ですぐすことができたからだ。千羽づるもたくさんもらえてなんてラッキーガールなんだろうとさえ思えた。

お母さんは私の前では笑っていたけれど、朝起きるといつも目は真っ赤にはれていた。お父さんは動かない足をさすってくれるけど、時どき足をギョツとにぎりしめて、私の足にらみつけた。だんだん、私は、下ばかり向いて動かない足を見つめる日が続いた。

そんな時、はーちゃんが私たちが手をつないでーりん車をしながら笑っている絵手紙をくれた。私たちはサントさんから色合いのーりん車をプレゼントしてもらい、いっしょに練習していた。私がない間はーちゃんはずつとその練習を待っていてくれたのだ。

リハビリのこう果もあって私は立つことができるようになり、また自分の足で歩けるようになった。お医者さんは目をまん丸に開けて私を見つめ、お母さんは生まれたての赤ちゃんのように声を上げて泣いた。きせきが起きたのだ。またはーちゃんと学校に行ける、またーりん車にのれると心はずんだ。

ところが、歩けるけれど足が重くて動かせない。ーりん車もうまく乗れない。はーちゃんとかくらべるとできないことがどんどんふえていった。もうはーちゃんとは会いたくないと思う日もあった。ある日、別のお友達と歩いて帰る時、私は同級生と同じスピードで歩くことができなかった。その時、はーちゃんは、私に合わせてゆっくり歩いてくれたんだと気づいた。

私は病気の後いしうで、うまく歩けないし、うまくしゃがむこともできない。トイレだつてうまくできない。でも、はーちゃんのおかげで私のできないという、バリアがかい放されたのだ。

一生車いす生活と言われた私に、入院中四十五日間、毎日手紙をくれてありがとう。はげましてくれてありがとう。

「どんなときでもやさしいはーちゃんが大好き！」

今度は私が伝えたい。私も、こまっている人がいたら手助けすることで、心のバリアフリー社会を築げんさせたい。

おばあちゃんの愛しかた

世利 宗二郎

「そうちゃん。」

いつも会った時に言ってくれるぼくの名前。ぼくは大好きなおばあちゃんが優しくそう呼んでくれることをうれしく思っている。いっどこにいてもその呼ぶ声を頭の中に思いうかべると、おばあちゃんの顔をすぐに思い出すことができる。それくらいぼくにとつておばあちゃんの声は耳になじんでいる。だから、おばあちゃんとの思い出も声を思いうかべるといつもリアルに思い出すことができる。

ぼくが小さい赤ちゃんの頃、おばあちゃんをよく「そうちゃん、そうちゃん。」と言ってぼくを抱っこしながら、いつもかべかけ時計のところで立ち止まって時計を見せてくれた。そのかべかけ時計は、おばあちゃんちに三十年前くらいからある二つのお人形がついた古くいらくり時計だ。時計の下から出ているひもを引っ張ると、四曲の音楽が順番になるしくみだ。おばあちゃんは、ぼくを抱っこしてゆらゆら身体をゆらしながら、ぼくのほっぺにほおずりして、曲をいつも聞かせてくれた。2つのお人形が時計の歯車をこいで、曲がなりおわるまでキコキコいいながら一生けん命に動いている。

小学生になって背がのびて、ぼくがそのひもに手が届くようになると、おばあちゃんに「みてみて！」といいながら自分ですらすらようになった。あきずにも何度も何度もならした。おばあちゃんはそばでしゃがんでぼくを抱きしめながら一緒にあきずに見てくれた。赤ちゃんの時から小学生になるまでおばあちゃんと一緒に見てきたから、その時計はぼくの一番のお気に入りの時計になった。

ある日おばあちゃんが、介この施設に入るようになった。買い物途中でこけて背骨がまがってしまった一人であらなくなったからだ。

施設には、少ない荷物しか持つて行けないので、その時計は持つて行くことができなかつた。おばあちゃんには、

「そうちゃんにあげて。」

と時計をお母さんにあずけた。お母さんが時計を持って帰ってきてくれた時、ぼくは時計を見てうれしかったとしても安心した。おばあちゃんとの思い出がまつた時計だから。でもおばあちゃんと一緒にこれから鳴らすことはないかもしれない。そう思ったらとても悲しくなった。

時計を鳴らしてみた。もしたらおばあちゃんが「そうちゃん。」と優しくいいながらほおずりしてくれたこと抱っこしてくれたことが思い出された。おばあちゃんの愛ってほっぺみたいにふわふわであったかい愛なんだな。施設に入っってなかなか会えなくなっただけ、今はおばあちゃんと電話で話すようになった。おばあちゃん、ぼくを愛してくれてありがとう。これからはぼくが「おばあちゃん」と呼んで元気にしてあげるからね！

最高の「ほうび」

長野 彪呀

ぼくには、百才の大きなおじいちゃんがいる。大じいちゃんは、ぼくと三つ年上のお兄ちゃんを目の中に入れてもいたくないというほどにかわいがってくれている。大じいちゃんの孫であるうちのお母さんも、相当大じいちゃんからは甘やかされてきたようだが、お兄ちゃんとはくが生まれてからは、ひ孫のほくらの方が、お母さんよりさらに上をいく甘やかされつぷりのようだ。何でそう思うのかというと、ぼくらが悪いことをしてお母さんにしかられていても、大じいちゃんはお母さんをしかるのだ。お母さんは、「今までは、いつもおじいちゃんはお母さんの味方だったのに……。」と、ぐちをこぼしている。

大じいちゃんは、会いに行く度におこづかいを用意してくれている。大体五百円玉一枚なのだが、おこづかいの名目によって、百円が上乘せされたり、時には五百円玉が二枚になったりする。小さい時から、決まって小さな小銭入れに首にかけられるようひもを結んで、「ごほうびだ！」

とわたししてくれる。そのおかげで、ぼくの部屋は、同じ小銭入れが大量……。大じいちゃんは、忘れっぽくなっているから、百円ショップに買い物に行く度に同じようなおさいふを何個も買って、ぼく達が会いに行つた時にすぐわたせるように準備してくれているのだ。

ぼくは、将棋をやっていて、大会でいい成績を出す事はもちろんごほうびの対象になるのだが、テストでいい点とつたとか学級委員になったとか、リレーの選手に選ばれたとか、運動会で一生けん命がんばったとか、大きな事でも小さな事でも何だつて、

「おお、よくがんばったな。じゃあ、ごほうびだ！」

と言って、おさいふを首にかけてくれる。そのおさいふはまるでメダルみたい。おこづかいがもらえる事はやっぱりうれいけれど、首にかけられたおさいふが、がんばった事の証みたいで、その事がとってもうれしい。

ぼくは、将棋の大会でもらった賞状やたてを見るとほこらしい気持ちになるが、将棋がどんどん強くなつて、大会で賞状をもらえるのが当たり前になつてくると、入賞できなかった大会では何とも残念な気持ちになり、すごくむなしい。でも、ぼくの大じいちゃんは、そういう大会でも、予選を通過できたとか、格上の相手を倒せたとか、小さながんばりを見つけて、おさいふメダルを首にかけてくれる。負けたとしてもそこまでがんばった過程が大仕事なんだという事をそつと教えてくれる。

どんなに小さな事でも、ぼくががんばった事をみとめてくれる大きいおじいちゃん。家にある大量のおさいふを見る度に、ぼくにはこれだけがんばった事があるという自信につながる。大じいちゃん、ぼくをいつもほめてくれて、ありがとう。